地域連携型教育プログラムは地域創造精神や課題発見解決力の育成に有効か

― 卒業生アンケートに見る成果と課題 ―

平成３０年１０月

島根大学教育学部

「教育臨床総合研究17　2018研究」

地域連携型教育プログラムは地域創造精神や課題発見解決力の育成に有効か
― 卒業生アンケートに見る成果と課題 ―

The effectiveness of regional collaborative education program to raise problem discovering and solving abilities and mind to cherish the local area
― Achievement and challenge through questionnaire of graduates ―

中　村　怜　詞*　　熊　丸　真太郎**
Satoshi NAKAMURA　　Shintaro KUMAMARU

要　旨

島根県立隠岐島前高校の魅力化プロジェクトが始まって10年になる。地域課題解決型の探究学習を設定し，多文化協働力や課題発見解決力などの生きる力の育成を目指している。平成25年度に入学し，27年度に卒業した生徒たちに卒業１年後に追跡調査を行った。本稿ではその調査結果を通して，島前高校の行う教育プログラムの成果と課題を明らかにした。

〔キーワード〕　地域連携型教育　課題発見解決力　卒業生アンケート　地域創造精神

Ⅰ　はじめに

島根県隠岐郡の島前地域は人口減少が著しい。少子高齢化も進み，高齢化率は40％を超え50％に迫っている。若者の島外流出も現在のところ止まる気配がない。島前地域には高校卒業後の進学先がなく，就職先も本土に比べれば種類が少ないためだ。「一度は島外に出てみたい」という若者の憧れもある。このような中で島前神楽などの伝統文化や第一次産業の後継者は不足し続け，島ならではの芸能や風景は失われる危機にある。島根県立隠岐島前高校（以下，島前高校）の生徒が帰って来たくない理由や，帰って来ることが出来ない理由を述べるときに，最も多い意見が「島に魅力的な仕事がない」ということである。島前地域を持続可能にするためには，島に魅力的な仕事が整備されることも重要である。

ただし，黙って待っていれば誰かが新規事業を立ち上げて，新しい仕事や魅力的な仕事を用意してくれる地域ではない。この10年間に島前地域で新たに立ち上げられた事業所は，わずか１社に留まる。この20年で考えても4社にとどまる上，このうち２社は第三セクターであり，意志ある個人が立ち上げたものは２社となる。「仕事がないから帰れない」は島の出身者たちにとって超えることの出来ない大きな壁になっている。この他者依存的なフレーズを「仕事を

*島根県立隠岐島前高等学校
**島根大学教育学部研究科教育実践開発専攻

造りに帰りたい」という主体性とアントレプレナーシップに富んだ言葉に変えていけるかどうかが，島前地域の持続にとって喫緊の課題である。

島前高校では2008年から高校魅力化プロジェクトを立ち上げ，それに伴い魅力的なカリキュラムの１つとして夢探究，地域学・地域地球学などの地域課題解決型の探究学習を設定した。これらの科目は地域創造精神（地域への愛着・誇り・感謝，地域社会に貢献する意志，地域起業家的視座・観点）を育み，地域の抱える困難な問題に向き合い解決する力（社会文化探究心，計画実行力，創造性，発信力，協働力，リーダーシップ，異文化受容力，人間関係形成力）を養うことを目的としている。

本稿では，島前高校が行ってきた教育プログラムを紹介したうえで，その教育プログラムが生徒たちにどのような影響を与えてきたのか，卒業生を対象にして実施したアンケート結果を用いて考察していく。

Ⅱ　地域連携型教育プログラム

島前高校では，①主体性・課題発見解決力，②多文化協働力，③キャリア形成意識の３つの力を育てることを目的として，カリキュラムを編成している。そのカリキュラムの中でこれらの力を育てるための中心に位置付けられていたのが「夢探究」，「地域学」（現在は地域生活学）・「地域地球学」などのPBL（Problem-Based-Learning）型の授業である。

次章で分析・考察するアンケートの対象者は平成25年度に入学し，27年度に卒業した生徒たちであったので，当時のカリキュラムを紹介する。島前高校では地域連携型課題解決プログラムとして，１年次と２年次に「夢探究」（総合的な学習の時間），２年次に「地域学」（学校設定科目），３年次に「地域地球学」（学校設定科目）という科目が設置されていた。「夢探究」は生徒全員が受講するが，「地域学」と「地域地球学」は地域創造コースを選択した生徒のみが受講する科目であった。

学年の生徒44人のうち，23人が特別進学コースで21人が地域創造コースに在籍していたため，およそ半数が「地域学」と「地域地球学」を受講していたことになる。

１．夢探究Ⅰ

夢探究Ⅰ（１年次の「夢探究」）は表１の様に設計しており，大きく分けると，１学期に人間関係の構築，２学期に地域社会を知り自分を知る，３学期に夢を描くという構成になっている。１学期に人間関係構築の時間を多く取っているのは，上の学年がクラス内で島内生と島外生に分断され，クラスがまとまらなくなったことがあったためである。その反省を活かし，異なる文化的背景を持つ生徒同士が協働的に学び合える環境を構築することを重視した。６月に実施されている仕事体験ゲームも協働的に取り組むワークショップであり，互いに意見を出し合いながら課題達成を目指すものであった。人間関係構築は単元に拘わらず全授業を通して意識されており，毎時間違う組み合わせになるようにペアワークの場を設定し，年間を通して自分の意見を発信し，他者の意見を傾聴する機会をつくり続けた。

１学期末から２学期の「地域社会を知る」単元では，地域の方たちに来校していただき，島の抱える課題やそれに対してどう取り組んでいるのかなどの話を伺った。ここで留意していた

ことは，単に話を聞くだけの受動的な聴衆で終わるのではなく，話を聞いた上で，自分たちならどう対応していくかをチームで協働的に考える機会を設定したことである。「自分たちなら」を考える機会をつくり続けることで，地域社会の問題を「じぶんごと化」して，主体性が生徒の中に芽生えることを狙い続けた。地域の課題を聞いた上で，それを解決するような島の観光プランや地域の課題を解決する新しい仕事を考え，発表する際には地域の当事者たちにお伝えし，それに対してフィードバックをもらうことで，独りよがりの内側に籠った提案にならず，当事者を意識したものとなるようにした。

２学期末までの体験を通して自分の価値や得意などを内省し，３学期に将来実現したい地域社会の像や自分の在り方を描いた。生徒は毎時間レポートシートを提出し，その日自分が考えたことを言語化した。教職員はそれに対して毎回フィードバックを返し，生徒の学びが深くなるように働きかけた。

２．地域学，夢探究Ⅱ

２年生になると実践へ移る。地域創造コースは地域学で，特別進学コースは夢探究で，地域課題を探究して解決するための実践をする。地域学は週３時間，夢探究は週1時間あり，授業時数的には地域創造コースの生徒の方が地域に多く出て探究できるチャンスを持っていたことになる。一方，特別進学コースは週1時間で課題について探究し，実践まで漕ぎつく必要があったため，授業外の時間も生徒同士で工夫して活動していた。地域学は１学期に地域の課題を知り，２学期に探究し，３学期に実践するように年間スケジュールが設定されていた。１学期の地域の課題を知る単元では，「自然・地理」「歴史・文化」「産業・定住・経済・交流・観光」「教育，福祉」の４テーマについて，教師が説明したり，地域の方が講師として説明した。チームは多様性を重視し，島内生と島外生の男女それぞれ１名ずつがいること，４～５人となることを条件として生徒たちに決めさせた。チーム決定後に講義などを聞く中で，特に解決したいと強く思ったものをチームごとに選び，探究していった。特別進学コースの夢探究Ⅱは講義を聞く時間が取れないため，１学期からチームごとに課題を設定して実践に向けて動き出した。探究活動では，①課題とその課題を選んだ理由，②課題の現状と課題の背景，③地域のニーズ，④課題解決提案，⑤解決策のメリットとデメリット，⑥実践までのスケジュールの６項目をプロジェクトプランシートに記入させることで，探究活動の際に考えるべき複数の視点を生徒が経験できるようにした。

教員のかかわりは，夢探究，地域学ともに各チームに教員が１人ついて支援した。教員の役割は指示を出すことではなく，ファシリテートとフィードバックとすることを４月当初やミーティングの度に確認し，生徒の主体的活動を妨げないように配慮した。

２学期以降は課題解決提案で終わらずに実践まで行う価値を伝え，全チームが実践することを強く求め続けた。最終的に実践までたどりつかなかったチームもあったが，多くのチームが自分たちなりに考えた解決提案を形にしていった。島前高校の探究活動において，実践まで求めるのには３つの理由がある。１つ目は，自分たちの提案を実現させることで，独りよがりで無責任な提案者や批評家に終わるのを避けて欲しいから。２つ目は，自分たちの考えを形にする体験が自己肯定感を高めると考えているから。たとえ小さな一歩であったとしても，踏み出

したことのある経験が次の一歩につながると考えている。３つ目は，実現のプロセスを通して地域の大人たちとかかわり，巻き込んでいく経験が出来るから。高校生の力だけで出来ることは限りがあり，地域のニーズとかけ離れたものになり得る。地域の方を巻き込むことで地域の方がメンターとして機能し，高校生の提案や実践にも責任感や本気度が増していく。

３．地域地球学

３年次に地域創造コースのみが受講する「地域地球学」は，週２時間で実施される。地域地球学の内容は，地域の魅力を世界に発信したり，世界にある知見を学んだうえで，島前地域の課題を解決することである。島前地域という閉じた世界の中だけで考えていては解決に向けてのヒントが得られないような難しい問題に対して，多角的な視点で物事を見て解決していける力を生徒に養うことを目的としている。

１学期は講義を受け，２学期から３学期にかけて探究と実践をしていく設計は，地域学と同じである。地域創造コースは，地域学とあわせて２年間で５時間地域課題探究をすることになる。特別進学コースと比較すると，地域に出て地域の大人と関わる機会が5倍違うことになる。このことを踏まえて，次章のアンケート考察では，地域創造コースと特別進学コースの比較もしてみたい。

Ⅲ　アンケート

2017年３月にアンケートを実施した。対象は2016年３月に卒業した生徒たち44人である。本アンケートは島前高校魅力化コーディネーターの奥田麻依子氏が設計し，溝上慎一氏（京都大学高等教育研究開発推進センター教育アセスメント室長）にご助言いただいて作成したものである。アンケートを送り返してくれたのは23名（地域創造コース出身者８名，特別進学コース出身者15名）と半分程度になったが，このアンケート結果を用いて島前高校の地域連携型の教育プログラムが，上記の力を育むのにどの程度有効に機能したと言えるのか，またどこに限界があったのかを探っていきたい。なお，島前高校のカリキュラムで地域とのかかわりながらPBL型の授業を行っていたのは，「夢探究」と「地域学・地域地球学」のみであり，その他の授業は一般的な高校の授業と同じである。そのため，地域創造精神や地域課題解決力の育成に関しては，上記の科目が最も強く影響を与えていると考えられる。

１．地域創造精神

アンケートの中で地域創造精神に関する項目を見ると，「島前地域が好きだ」「島前地域に愛着がある」「島前地域は大切だと思う」は共に22人（95.7%）であり，総じて多くの卒業生が卒業後１年経った段階でも好意的な感情を有していることがわかる。アンケート回答者23名の内，島前地域出身者は10名であり，島外出身者も島前地域に対して愛着を持っている。「島前地域は“自分のまち”だという感じがする」は18名（78.3%）が肯定的回答をしており，そのうち８名は島外出身者である。アンケート回答者23名のうち15名が島外出身者であることを考えると，島外生の約半数が出身地でもない島前地域を，自分のまちとして捉えるようになっている。また，このアンケート項目はQ34－9「島前地域に自分の居場所がある気がする」との

相関関係が高く，島前地域は自分のまちだと感じている18名中15名が島前地域に自分の居場所を感じている。夢探究，地域学などを通して，島前地域の方たちと関わる機会が多く創出されたことで，地域に居場所が生まれ，島前地域のことを「じぶんごと化」する結果に結びついたものと考えられる。実際，Q31－14「高校生活を通して島前地域に興味を持った」は21人（91.3%）であり，島前地域出身者10人のうち８人が高校時代の諸活動を通して島前地域への意識を高めている。ずっと住んでいればその居住地域に興味や愛着を持てるようになっていくわけではなく，地域に出て多様な人と交流したり，地域のために知恵を出し合い貢献していく過程で地域への帰属意識が形成されていく。

地域のことを「じぶんごと化」できているということに関しては，Q34－12，13の項目（「島前地域にいつまでも変わって欲しくないものがある」「島前地域になくなってしまうと悲しいものがある」）にも表れており，100%の生徒が肯定的な回答をしている。これは，地域に出て行って地域の中にある良さなどを認識していなければ肯定的な回答になり得ないものであり，島前地域が彼らにとって何かしら意味や価値を有するものになっている証である。そんな彼らはQ34－15「島前地域に対して，何らかの形で貢献したいと思う」に対して21人（91.3%）が肯定的な回答をしており，島前地域に主体的に関わっていこうという意思を持っている。一方で，現在すでに貢献出来ているかと問われると（Q34－16），肯定的回答はわずか４人（いずれも島内出身者）である。しかし，卒業後1年しか経過しておらず，現在ほぼ全員が島前地域にいないことを考えると，否定的に捉えるデータではない。同様に，Q34－11「島前地域にずっと住み続けたい」は肯定的回答が９名しかいないが，内訳は島前出身者７名，県外出身者２名であり，県外出身者２名が大学卒業後に島前地域に帰って来たいという意思を有していることが，むしろ特筆すべきことである。この項目に関しては，島前出身者は10人中７人が肯定的回答で，２名がどちらとも言えない，１名がずっと住みたいとは思わないという回答である。島根県のUターン率が約50%であることを考えれば，これも否定的な意味のあるデータとは言えない。

２．課題発見解決力

次に困難な課題に向き合い，解決したり対応する力に関する項目を見ていきたい。この力の構成要素は【社会文化探究心・計画実行力・創造性・リーダーシップ・発信力・協働力・人間関係形成力・異文化受容力】など多岐にわたる。１つ１つ見ていきたい。それぞれの要素について，卒業生たちの現在の自己評価と，高校時代に身に着いたと考えている力を関連要素ごとに並べて整理した。これらを比較しながら考察していく。なお，複数の力に関わる質問項目もあるため，同じ質問が複数回出ていることがある。

（1）分類ごとの考察

1）社会文化探究力

●最近のあなたを振り返って，下記の事項がどの程度身に着いたと感じますか。

番号	内容	肯定的回答
Q38－ 2	社会の問題に対して分析したり、考えたりすることが出来る	12人（52.2%）
Q38－ 4	図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たり、分からないことを調べたりすることが出来る	19人（82.6%）
Q38－17	異文化や世界に関心を持つことが出来る	18人（78.3%）
Q38－25	社会の変化に興味を持ちこれから必要になることを考えて行動できる	11人（47.8%）

◆高校生活を振り返って，次の事柄についてどの程度あてはまるか教えてください。

番号	内容	肯定的回答
Q31－ 2	困難な出来事にぶつかった際などに「考え抜く力」が身についた	19人（82.6%）
Q31－14	高校生活を通して、島前地域に興味を持った	21人（91.3%）
Q31－15	高校生活を通して、グローバルに興味を持った	12人（52.2%）
Q31－16	自分は他者や地域に貢献できると感じた	13人（56.5%）

【社会文化探究力】を問う質問とは言っても，高校時代についた力と現在の自分に対する評価に対する質問項目が同一ではないため，単純に比較することは難しい。高校時代に島前地域に興味を持つことが出来た生徒は91.3%おり，地域に対する興味は持てているが，グローバルに対する興味は52%ほどにとどまっている。現在では異文化や世界に興味を持つことが出来るものが78.3%となっており，島から外に出たことで視野が広くなったのかもしれない。Q38－2,25の２つの項目を見ると，どちらも50%前後の数値となっており，分析したり考えたりする力について，自信が持てないものが半数程度いることが分かる。

Q31－16「自分は他者や地域に貢献できると感じた」は56.5%と決して高い数値ではないが，内閣府が平成26年度に調査した【子ども・若者白書「特集　今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの～」】のデータを見ると，「社会現象が変えられるかもしれない」と考える日本の若者はわずか30.2%である。これと比較すると，島前高校卒業生の社会にいい影響を与えられるという実感は約２倍となっており，突出して高いと言える。ちなみに，56.5%という数値は同データで最も高い数値を出しているアメリカ（52.9%）やドイツ（52.6%）よりも高い。高校時代に実践まで漕ぎつけて，自分の足で一歩踏み出した経験や，社会課題に対して自分なりに出来ることを探究して実践した経験が活きていると考えられる。

2）計画実行力

●最近のあなたを振り返って，下記の事項がどの程度身に着いたと感じますか。

番号	内容	肯定的回答
Q38－1	計画や目標を立てて日々を過ごすことができる	12人（52.2%）
Q38－10	時間を有効に使うことができる	10人（43.5%）
Q38－12	困難なことでもチャレンジできる	18人（78.3%）
Q38－16	忍耐強く物事に取り組むことができる	20人（ 87%）
Q38－26	現場に足を運び自分の目で見て考え、行動できる	15人（65.2%）

◆高校生活を振り返って，次の事柄についてどの程度あてはまるか教えてください。

番号	内容	肯定的回答
Q31－1	何事にも主体的に「前に踏み出す力」が身についた	16人（69.6%）
Q31－6	自分で計画を立てて実践し、振り返る力がついた	13人（56.5%）
Q31－9	嫌なことがあっても逃げずに何かに本気で取り組んだ（結果は問わない）	22人（95.7%）
Q31－10	何か達成感を得る経験をした	20人（ 87%）
Q31－16	自分は他者や地域に貢献できると感じた	13人（56.5%）

現在の自分について，困難なことにチャレンジしたり，忍耐強く物事に取り組む力に関しては，78%以上が肯定的な回答をしている一方で，計画的に物事を進めて実践していく力（Q38－1,10）についてはそれぞれ52.2%，43.5%である。ベネッセ教育総合研究所が全国の大学生4948人に行った調査（第３回大学生の学習・生活実態調査報告書［2016年］）では，「自分で目標を設定し，計画的に行動する」と答えたのは58%であり，このデータと比較しても計画や目標を立てて行動する力はやはり低いと言える。島前高校卒業生で計画的に目標を立てて日々を過ごすことができると答えた12人のうち10人は，高校生活を振り返った時に自分で計画を立てて実践して振り返る力がついたと答えており，高校時代につけることが出来た力が現在でも活きていることが分かる。因みに，次章で取り上げる地域創造コースと特別進学コースの比較では，地域創造コース出身者はQ38－1「計画や目標を立てて日々を過ごすことができる」，10「時間を有効に使うことができる」でそれぞれ肯定的回答が62.5%と75.0%であり，ベネッセ調査の全国平均を上回る。

アンケートを取る段階で持っていた仮説として，主体的に前に踏み出す力がついたり，他者や地域に貢献できる自信や自己肯定感が高まったものは，現場に足を運び自分で考え行動出来たり，困難なことに粘り強く取り組むのではないかと考えていたが，クロス集計をすると以下のようになった。何事にも主体的に「前に踏み出す力」が身についたと答えた16人は，「困難なことでもチャレンジできる」，「忍耐強く物事に取り組むことができる」，「現場に足を運び自分の身で見て考え行動できる」の３項目でも肯定的に回答したものが80%を超えており，強い相関関係が見える。自分は他者や地域に貢献できると感じた13人は「困難なことでもチャレン

ジできる」,「忍耐強く物事に取り組むことができる」,「現場に足を運び自分の身で見て考え行動できる」の３項目で76.9%以上が肯定的な回答をしており，こちらも高校時代の経験が現在に影響を及ぼしていることが分かる。

「困難なことでもチャレンジできる」という項目に関しては，島前高校卒業生は78.3%であるが，上掲の内閣府調査では「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」と回答した日本人は52.2%であり，両者を比較すると，これも突出して高い数字である。

＜クロス集計＞

最近のあなた／高校生活	困難なことでもチャレンジできる	忍耐強く物事に取り組むことができる	現場に足を運び自分の目で見て考え、行動できる
何事にも主体的に「前に踏み出す力」が身についた16人	14人（87.5%）	13人（81.3%）	13人（81.3%）
自分は他者や地域に貢献できると感じた13人	11人（84.6%）	10人（76.9%）	10人（76.9%）

３）創造性

●最近のあなたを振り返って，下記の事項がどの程度身に着いたと感じますか。

番号	内容	肯定的回答
Q38－11	新しいアイディアを得たり発見することができる	14人（60.9%）
Q38－24	異なる意見に折り合いをつけ、新たなアイディアを考えることができる	14人（60.9%）

◆高校生活を振り返って，次の事柄についてどの程度あてはまるか教えてください。

番号	内容	肯定的回答
Q31－12	周囲に支援を求めることで道が開ける経験をした	18人（78.3%）

Q38－11,24ともに肯定的な回答は60.9%と高くはない。前掲の第３回大学生の学習・生活実態調査報告書［2016年］では「既存の枠にとらわれず，新しい発想やアイディアを出す」力がついたと回答しているのは52.4%であり，新しいアイディアを得たり発見することについても，島前高校卒業生は全国平均よりも自分について自信をもっている。

4）リーダーシップ

●最近のあなたを振り返って，下記の事項がどの程度身に着いたと感じますか。

番号	内容	肯定的回答
Q38－ 3	リーダーシップをとることができる	11人（47.8%）
Q38－19	身近な課題を見つけたら、自ら進んで解決に取り組もうとする	11人（47.8%）
Q38－23	自身の想いを相手に伝え、巻き込むことができる	14人（60.9%）

◆高校生活を振り返って，次の事柄についてどの程度あてはまるか教えてください。

番号	内容	肯定的回答
Q31－ 1	何事にも主体的に「前に踏み出す力」が身についた	16人（69.5%）
Q31－11	自分が動いたことで、周りに応援してもらえた	18人（78.3%）

高校時代に「何事にも主体的に「前に踏み出す力」が身についた」と考えているものが約70%いる一方で，最近の自分を振り返ると，リーダーシップをとったり身近な課題の解決に進んで取り組めているものは50%を切っている。しかし，ここでも前掲の第３回大学生の学習・生活実態調査報告書［2016年］と比較すると，学生時代を通して「自ら先頭に立って行動し，グループをまとめる」力がついたと回答しているものは42.9%にとどまり，島前高校卒業生の方がリーダーシップの発揮に対する自己肯定感が高い。

5）発信力

●最近のあなたを振り返って，下記の事項がどの程度身に着いたと感じますか。

番号	内容	肯定的回答
Q38－ 6	自分の言葉で文章を書くことができる	21人（91.3%）
Q38－ 7	人前で発表することができる	17人（73.9%）

◆高校生活を振り返って，次の事柄についてどの程度あてはまるか教えてください。

番号	内容	肯定的回答
Q31－ 7	自分の意見を表現する力が身に着いた	15人（65.2%）

高校時代に「自分の意見を表現する力が身に着いた」と答えたのは15人（65.2%）だが，最近の自分を振り返って，その力がついたと感じているものはQ38－6が21人（91.3%），Q38－7が17人（73.9%）おり，最近の自分に対して肯定的な評価をしているものの方が多い。進学先や就職先での経験を通してそのような力が身についていったものと考えられる。

6）協働力

●最近のあなたを振り返って，下記の事項がどの程度身に着いたと感じますか。

番号	内容	肯定的回答
Q38－ 5	他の人と議論することができる	16人（69.6%）
Q38－ 8	他の人と協力して物事に取り組める	21人（91.3%）
Q38－20	チームにおいて自分の役割を見出し、担うことができる	16人（69.5%）
Q38－24	異なる意見に折り合いをつけ、新たなアイディアを考えることができる	14人（60.9%）

◆高校生活を振り返って，次の事柄についてどの程度あてはまるか教えてください。

番号	内容	肯定的回答
Q31－ 3	「チームで働く力」が身についた（協働する力）	20人（ 87%）
Q31－ 8	自分と異なる意見・価値観を持つ人と折り合いをつける力が身についた	20人（ 87%）
Q31－11	自分が動いたことで、周りに応援してもらえた	18人（78.3%）
Q31－12	周囲に支援を求めることで道が開ける経験をした	18人（78.3%）

高校時代を通して「チームで働く力」（Q31－3）や異なる意見・価値観を持つ人と折り合いをつける力（Q31－8）がついたと答えたものが87%とおり，最近の自分を振り返っても他の人と協力して物事に取り組めると自己評価したものが91.3%いるため，協働する力に関しては自信を持っていることが分かる。これに関しては高校時代の経験も関係している可能性がある。自分が動くことで周囲に応援してもらえたり（Q31－11），周囲の支援を得て道を開く経験をした（Q31－12）ものが80%近くおり，自分の行動に対して肯定的な反応を得たり，他者に頼ることの価値を経験できている。このことが，他者と関わりながら働くことを前向きにしている可能性がある。一方で，他者との議論（Q38－5）や異なる意見に折り合いをつけて新しいアイディアを考える力（Q38－24）に関しては，肯定的な回答が70%を切っており，やや自信を失っている。

前掲の第3回大学生の学習・生活実態調査報告書［2016年］では，大学生活を通して「人と協力しながらものごとを進める」力がついたと回答したのは70.0%，「異なる意見や立場を踏まえて考えをまとめる」力がついたと回答したのは64.5%となっている。島前高校卒業生は，それぞれどちらも87%（Q31－3,8）が高校時代にそのような力がついたと回答しており，全国調査の平均より大きく上回っている。学生時代の学習環境やカリキュラムが大きく影響していると考えられる。

7）人間関係形成力

●最近のあなたを振り返って，下記の事項がどの程度身に着いたと感じますか。

番号	内容	肯定的回答
Q38－22	必要に応じて新たに人とのつながりを広げることができる	17人（73.9%）

◆高校生活を振り返って，次の事柄についてどの程度あてはまるか教えてください。

番号	内容	肯定的回答
Q31－ 4	「豊かな人間関係」が身についた	21人（91.3%）
Q31－13	自分には居場所があると感じた	22人（95.7%）
Q31－19	高校時代に信頼できる人に出会えた	23人（100%）
Q31－20	高校時代に尊敬できる人に出会えた	23人（100%）
Q31－21	目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができた	14人（60.9%）

高校時代の経験のうち，信頼できる人（Q31－19）や尊敬できる人（Q31－20）に出会えたと考えるものは100%で，豊かな人間関係（Q31－4）の中に自分の居場所を感じることができている（Q31－13）。これらの項目はすべて90%を超えている。現在も必要に応じて新たに人とつながりを広げられると考えているものが73.9%おり，総じて人間関係を形成することに関しては肯定的な回答が多い。Q28「高校生活を振り返って，島前高校で学んだことに対して，今のあなたの気持ちに当てはまるものを１つ選んでください」という問いに対しては100%が「とても良かった」「良かった」と肯定的な回答をしており，その良し悪しを判断する際に重視した項目の上位３つは１位：友人関係（先輩後輩を含む）87%，２位：夢探究など自身のキャリアに関わる授業69.6%，３位：地域の大人との人間関係56.5%となっている。高校時代に学校内外に豊かな人間関係を形成できたことは，彼らの高校生活に対する満足度にも直結している。

ここでも上掲の内閣府調査と比較すると，内閣府調査では日本人学生の学校生活満足度は69.9%で友人関係の満足度は64.1%であり，島前高校卒業生の数値の方がはるかに高い。探究活動を通して２年以上チームメンバーと意見を交わし合い，支え合う経験をしている彼らは，表面的な友人関係で終わらず，信頼し合える友人関係を形成することができている。また，この内閣府調査の中では「居場所がある」と感じている若者ほど，社会貢献や対人関係に前向きな傾向があり，「悩みを相談できる友人がいる」と答えている若者ほど「なりたい自分に近づいている」と自己を肯定的に捉えることができていると結論付けている。島前高校生徒の半数以上が地域に貢献できたと考えているのも，多様な人間関係の中に居場所をつくれたことと無関係ではないかもしれない。

８）異文化受容力

●最近のあなたを振り返って，下記の事項がどの程度身に着いたと感じますか。

番号	内容	肯定的回答
Q38－ 8	他の人と協力して物事に取り組める	21人（91.3%）
Q38－14	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	20人（ 87%）
Q38－15	人に対して思いやりを持つことができる	20人（ 87%）
Q38－17	異文化や世界に関心を持つことができる	18人（78.3%）
Q38－24	異なる意見に折り合いをつけ、新たなアイディアを考えることができる	14人（60.9%）

◆高校生活を振り返って，次の事柄についてどの程度あてはまるか教えてください。

番号	内容	肯定的回答
Q31－8	自分とは異なる意見・価値観を持つ人と折り合いをつける力が身に着いた	20人（ 87%）
Q31－15	高校生活を通して、グローバルに興味を持った	12人（52.2%）

アンケート結果を見ると，人間関係形成力と並んで最も高い数値が並んでいるのが，異文化受容力であった。高校時代に「自分とは異なる意見・価値観を持つ人と折り合いをつける力が身に着いた」と考えるものが87%おり，最近の自分を振り返っても他の人と協力したり（Q38－8），思いやりをもって（Q38－15）異なる意見や価値を尊重できる（Q38－14）と答えたものが87%以上いる。前掲の第3回大学生の学習・生活実態調査報告書［2016年］と比較すると，「社会や文化の多様性を理解し，尊重する」力が大学生活を通して身に着いたと回答しているのは64.4%であり，異文化受容の姿勢にここでも大きな差がある。島前高校は全国各地から生徒が集まっており，島出身の生徒と協働的に学ぶ環境が入学時から3年間用意されている。日常的に異なる価値観同士をぶつけ合い，折り合いをつけてきた経験が活きているのかもしれない。

一方，Q38－24の「異なる意見に折り合いをつけ，新たなアイディアを考えることができる」と考えているものは，約60%と他の項目より低い。単に他者の意見を受け入れるだけでなく，自分の意見も相手に伝えて議論し，複数の意見を統合して新しいアイディアを考えるような抽象的思考力が求められるものには自信が持てていない。また，高校時代の経験に目を向けると，「高校生活を通して，グローバルに興味を持った」が12人（52.2%）とおよそ半分にとどまっている。この学年は島前高校の中ではグローカル元年に位置付けられており，それまでの「地域に出る」教育（ローカル路線）に加えて「地域を出る」教育（グローバル路線）にも力を入れ始めた学年であった。シンガポール研修旅行をスタートし，シンガポールでの英語プレゼンテーションや現地大学生や中学生との交流，ホームステイなど，海外での他流試合を行ったほか，NPO法人カタリバの「マイプロ」に参加するなど，国内でも多くの他流試合を行った。進路講演会でもオーストラリア大使館の総領事や税所篤快氏など，世界で活躍する社会起業家の話を聞いたり，対話する機会を設けることで多様な価値や視点に出会う機会を設定していた。にもかかわらず，50%そこそこの数値で止まっていることは，島前地域への帰属意識や興味・関心が高いこととあわせて考えると，やはりイベント的な取り組みではインパクトを残したとしても生徒の価値観を大きく方向付けるものにはならないということであろう。対照的に，1年生の時から2年生の終わりまで，2年間継続して地域と関わりながら探究活動をしてきたことは，生徒の島前地域への関心の高さに結びついている。

（2）地域創造コースと特別進学コースの比較

H25年度入学生は特別進学コース選択者と地域創造コースとで大きくカリキュラムが異なる。特別進学コースは，一般的な進学校と同じく国語・数学・英語・理科・社会の授業時数が多く，

課題解決型の探究活動の時数も２年生と３年生の２年間で１単位しかない。一方，地域創造コースは２年間で５単位あり，その分数学などの授業時数が少なかったり，選択制で受講しないものもいる。これらのカリキュラムの違いを踏まえたうえで，身に着けた力にそれぞれのコースでどのような差異があるのか見ていきたい。

下表は，Q38「最近のあなたを振り返って，下記の事項がどの程度身に着いたと感じますか」，とQ31「高校生活を振り返って，次の事柄についてどの程度当てはまるのか教えてください」という２つの問いについて，肯定的回答人数とそれを割合（%）に換算したものをコースごとにまとめたものである。地域創造コースと特別進学コースの肯定的回答割合の差が５～9.9%ついたものを中群，10%以上差がついたものを高群としてまとめた。以下，それぞれについて考察していく。

Q38	最近のあなたを振り返って、下記の事項がどの程度身についたと感じますか。 単一回答	全体	肯定的回答の比較					
			地域創造コース		特別進学コース		差	
			人数	%	人数	%	%	
10	時間を有効に使うことができる	23	6/8	75.0	4/15	26.6	48.4	地域創造高
19	身近な課題を見つけたら、自ら進んで解決に取り組もうとする	23	6/8	75.0	5/15	33.3	41.7	地域創造高
21	今の自分にとって必要なことを学び続けることができる	23	7/8	87.5	9/15	60.0	27.5	地域創造高
18	自分を客観的に理解することができる	23	7/8	87.5	10/15	66.6	20.9	地域創造高
16	忍耐強く物事にとりくむことができる	23	8/8	100	12/15	80.0	20.0	地域創造高
1	計画や目標を立てて日々を過ごすことができる	23	5/8	62.5	7/15	46.6	15.9	地域創造高
2	社会の問題に対して分析したり、考えたりすることができる	23	5/8	62.5	7/15	46.6	15.9	地域創造高
12	困難なことでもチャレンジすることができる	23	7/8	87.5	11/15	73.3	14.2	地域創造高
8	他の人と協力して物事に取り組める	23	8/8	100	13/15	86.6	13.4	地域創造高
13	人の話を聞くことができる	23	8/8	100	13/15	86.6	13.4	地域創造高
20	チームにおいて自分の役割を見出し、担うことができる	23	6/8	75.0	10/15	66.6	8.4	地域創造中
25	社会の変化に興味を持ち、これから必要になることを考えて行動できる	23	4/8	50.0	7/15	46.6	3.4	
11	新しいアイディアを得たり発見することができる	23	5/8	62.5	9/15	60.0	2.5	
23	自身の想いを相手に伝え、巻き込むことができる	23	5/8	62.5	9/15	60.0	2.5	
14	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	23	7/8	87.5	13/15	86.6	0.9	
26	現場に足を運び、自分の目で見て考え、行動できる	23	5/8	62.5	10/15	66.6	-4.1	

6	自分の言葉で文章を書くことができる	23	7/8	87.5	14/15	93.3	-5.8	特進中
9	コンピュータやインターネットを操作することができる	23	7/8	87.5	14/15	93.3	-5.8	
5	他の人と議論することができる	23	5/8	62.5	11/15	73.3	-10.8	特進高
4	図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たりわからないことを調べたりすることができる	23	6/8	75.0	13/15	86.6	-11.6	
3	リーダーシップをとることができる	23	3/8	37.5	8/15	53.3	-15.8	
24	異なる意見に折り合いをつけ、新たなアイデアを考えることができる	23	4/8	50.0	10/15	66.6	-16.6	
7	人前で発表をすることができる	23	5/8	62.5	12/15	80.0	-17.5	
22	必要に応じて新たに人とのつながりを広げることができる	23	5/8	62.5	12/15	80.0	-17.5	
15	人に対して思いやりを持つことができる	23	6/8	75.0	14/15	93.3	-18.3	
17	異文化や世界に関心をもつことができる	23	5/8	62.5	13/15	86.6	-24.1	

地域創造コースが高い数値を出した高群を見ると，Q38－10, 16, 1, 12の「計画実行力」，Q38－10, 16, 1, 12の「社会文化探究力」，Q38－8, 13の「協働力」に関するものが高いことが分かる。そのほかに，Q38－21「今の自分にとって必要なことを学び続けることができる」，Q38－18「自分を客観的に理解することができる」が高群に含まれている。これらを合わせて考えると，PBLを進めたり，毎時間レポートを書いて，その日の自分やチームの動きについて振り返りをし続けたことで，客観的に自己分析してPDCAサイクルを回したり，自律的，主体的に学び続ける力が備わったと言える。このことは，地域創造コースの数値が高い中群Q38－20「チームにおいて自分の役割を見出し，担うことができる」にも当てはまる。また，計画を立てる力に関しては，地域学などで実践までのスケジュールを作成し，それに対して教員からのフィードバックが与えられたり，実践過程に計画を修正するなどPDCAサイクルを回し続けたことも大きく影響していると考えられる。(i)

地域創造コースの数値が高かった項目の上位３つを見ると，Q38－10「時間を有効に使うことができる」，19「身近な課題を見つけたら，自ら進んで解決に取り組もうとする」，21「今の自分にとって必要なことを学び続けることができる」である。これらは文科省が「子どもたちに求められる学力についての基本的な考え方」の中で述べている「確かな学力」に関する記述とぴったりと重なる。以下文科省の資料を引用する(ii)。「これからの未曽有の激しい変化が予想される社会においては，（中略）直面する課題を乗り越えて，生涯にわたり学び続ける力をはぐくむことが必要である。（中略）［確かな学力］とは，（中略）学ぶ意欲や，自分で課題を見付けて，自ら学び，主体的に判断し，以下略」新学習指導要領で定める，子どもたちに育てたい力に関しては，地域創造コースの方が有意な差をもってつけることが出来ていると言える。生徒たちの日常の学びの中に探究活動が埋め込まれていることの重要性が見える。

特別進学コースの数値が高い項目の高群，中群を見ると，特にどこかのカテゴリーが高いという分類は出来ない。しかし，Q38－5「ほかの人と議論できる」，24「異なる意見に折り合い

をつけ，新たなアイディアを考えることができる」というような，抽象的思考力が求められる項目や，Q38－3「リーダーシップをとることができる」，7「人前で発表をすることができる」など，人前に出たり，周囲を引っ張っていく項目が高いと言える。

Q31	高校生活を振り返って、次の事柄についてどの程度当てはまるか教えてください。 単一回答	全体	肯定的回答の比較					
			地域創造コース		特別進学コース		差	
			人数	%	人数	%	%	
6	自分で計画を立てて実践し、振り返る力が身についた	23	7/8	87.5	6/15	40.0	47.5	地域創造高
10	何か達成感を得る経験をした	23	8/8	100	12/15	80.0	20.0	
7	自分の意見を表現する力が身についた	23	6/8	75.0	9/15	60.0	15.0	
5	自ら大きく成長した「一皮むけた経験」をすることができた	23	7/8	87.5	11/15	73.3	14.2	
11	自分が動いたことで、周りに応援してもらえた	23	7/8	87.5	11/15	73.3	14.2	
12	周囲に支援を求めることで道が開ける経験をした	23	7/8	87.5	11/15	73.3	14.2	
18	高校時代のチーム活動（部活動や地域課題解決等）において、対立を乗り越えた	23	7/8	87.5	11/15	73.3	14.2	
4	「豊かな人間関係」が身についた	23	8/8	100	13/15	86.6	13.4	
16	自分は他者や地域に貢献できると感じた	23	5/8	62.5	8/15	53.3	9.2	地域創造中
17	高校時代のチーム活動（部活動や地域課題解決等）において、自身の強みが分かった	23	5/8	62.5	8/15	53.3	9.2	
1	何ごとにも主体的に「前に踏み出す力」が身についた	23	6/8	75.0	10/15	66.6	8.4	
9	嫌なことがあっても逃げずに何かに本気で取り組んだ（結果は問わない）	23	8/8	100	14/15	93.3	6.7	
13	自分には居場所があると感じた	23	8/8	100	14/15	93.3	6.7	
3	「チームで働く力」が身についた（協働する力）	23	7/8	87.5	13/15	86.6	0.9	
8	自分と異なる意見・価値観を持つ人と折り合いをつける力が身についた	23	7/8	87.5	13/15	86.6	0.9	
19	高校時代に信頼できる人（友人・大人関わらず）に出会えた	23	8/8	100	15/15	100	0.0	
20	高校時代に尊敬できる人（友人・大人関わらず）に出会えた	23	8/8	100	15/15	100	0.0	
14	高校生活を通して、島前地域に興味を持った	23	7/8	87.5	14/15	93.3	-5.8	特進中
2	困難な出来事にぶつかった際などに「考え抜く力」が身についた	23	6/8	75.0	13/15	86.6	-11.6	特進高
21	目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができた	23	4/8	50	10/15	66.6	-16.6	
15	高校生活を通して、グローバルに興味を持った	23	3/8	37.5	9/15	60.0	-22.5	

地域創造コースの数値が高い高群，中群を見ると，Q31－6, 10, 5, 1, 9などの「計画実行力」，Q31－11, 18, 17などの「協働力」に関する項目が高い。これはQ38と比較しても同様の傾向である。やはり，高校時代に身に着いたと感じる力と，現状の自分に身に着いたと感じている力にはかかわりが深い。

一方で，特別進学コースの数値が高い高群，中群を見ると，Q31－14, 15, 21など「社会文化探究力」に関する項目が高い。最も地域創造コースと差があったのはQ31－15「高校生活を通してグローバルに興味を持った」で，世界に対する知的好奇心は特別進学コースの方が高い数値であった。Q31－2「困難な出来事にぶつかった際に考え抜く力が身についた」のように，思考力が求められる項目はQ38の比較時と同様，やはり特別進学コースの方が高かった。このことに関しては，カリキュラムで大半を占めていた教科学習や受験時に推薦・ＡＯ入試を選ぶものが多かったことから，グループディスカッション練習，小論文，面接練習などに３年生の秋ころから徹底的に取り組んだことも影響している可能性がある。

（３）降順に並べての考察

データを降順に並べて，肯定的回答が70％以上であったものと60％を切っていたものに分けて考察した。

Q31	高校生活を振り返って、次の事柄についてどの程度当てはまるか教えてください。 単一回答	全体（N）	1 当てはまる	2 どちらかといえば当てはまる	肯定的回答
19	高校時代に信頼できる人（友人・大人関わらず）に出会えた	23	78.3	21.7	100.0
20	高校時代に尊敬できる人（友人・大人関わらず）に出会えた	23	73.9	26.1	100.0
9	嫌なことがあっても逃げずに何かに本気で取り組んだ（結果は問わない）	23	26.1	69.6	95.7
13	自分には居場所があると感じた	23	56.5	39.1	95.7
14	高校生活を通して、島前地域に興味を持った	23	47.8	43.5	91.3
4	「豊かな人間関係」が身についた	23	39.1	52.2	91.3
3	「チームで働く力」が身についた（協働する力）	23	30.4	56.5	87.0
8	自分と異なる意見・価値観を持つ人と折り合いをつける力が身についた	23	39.1	47.8	87.0
10	何か達成感を得る経験をした	23	52.2	34.8	87.0
2	困難な出来事にぶつかった際などに「考え抜く力」が身についた	23	26.1	56.5	82.6
5	自ら大きく成長した「一皮むけた経験」をすることができた	23	30.4	47.8	78.3
18	高校時代のチーム活動（部活動や地域課題解決等）において、対立を乗り越えた	23	17.4	60.9	78.3
11	自分が動いたことで、周りに応援してもらえた	23	39.1	39.1	78.3
12	周囲に支援を求めることで道が開ける経験をした	23	34.8	43.5	78.3

1	何ごとにも主体的に「前に踏み出す力」が身についた	23	8.7	60.9	69.6
7	自分の意見を表現する力が身についた	23	43.5	21.7	65.2
21	目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができた	23	17.4	43.5	60.9
6	自分で計画を立てて実践し、振り返る力が身についた	23	13.0	43.5	56.5
16	自分は他者や地域に貢献できると感じた	23	13.0	43.5	56.5
17	高校時代のチーム活動（部活動や地域課題解決等）において、自身の強みが分かった	23	17.4	39.1	56.5
15	高校生活を通して、グローバルに興味を持った	23	26.1	26.1	52.2

肯定的な回答が70%を超えた項目を見てみると，【人間関係形成力】（Q 31－4, 13, 19, 20）【協働力】（Q 31－3, 8, 12, 18）【計画実行力】（Q 31－5, 9, 15）の３つのカテゴリーに集中している。これらはすべて非認知能力に分類されるものであり，生きていくうえで最も重要な資質とも言われている[iii]。【計画実行力】に関するものは，いわゆる「grit」（やり抜く力）に該当するものである。高校時代に何かを成し遂げた経験や一皮むけた経験を通して，自分自身の可能性を肯定的に捉えたり，自分自身を変化・成長させていける自信を獲得していったのではないだろうか。

反対に肯定的回答が60%を切ったものを見ると，特定のカテゴリーには括ることができない。この中で特に気になるのは，Q 31－17「高校時代のチーム活動（部活動や地域課題解決等）において，自身の強みが分かった」という項目が入っていることである。コースによって時数に差こそあれ，２年間にわたってチーム活動をしてきているにもかかわらず，チーム活動における自己の強みが分かったというものが60%を切っている。地域創造コースと特別進学コースの比較をすると，地域創造コースの方が9.2%高い数値を出している項目であるため，チーム活動の時間数とそれに伴う振り返りの回数の差がここでも表れている。この数値を今後上げていくためには，活動後の振り返りにおいて，自己評価と相互評価の頻度，教員からのフィードバックのタイミングと方法，振り返りシートの質問項目の質などを検証してプログラムを再構築する必要がある。

Q38	最近のあなたを振り返って、下記の事項がどの程度身についたと感じますか。 単一回答	全体（N）	1 かなり身についた	2 まあまあ身についた	肯定的回答
13	人の話を聞くことができる	23	43.5	47.8	91.3
6	自分の言葉で文章を書くことができる	23	34.8	56.5	91.3
8	他の人と協力して物事に取り組める	23	34.8	56.5	91.3
9	コンピュータやインターネットを操作することができる	23	34.8	56.5	91.3
14	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	23	47.8	39.1	87.0
15	人に対して思いやりを持つことができる	23	43.5	43.5	87.0
16	忍耐強く物事にとりくむことができる	23	26.1	60.9	87.0

4	図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たりわからないことを調べたりすることができる	23	13.0	69.6	82.6
12	困難なことでもチャレンジすることができる	23	17.4	60.9	78.3
17	異文化や世界に関心をもつことができる	23	26.1	52.2	78.3
7	人前で発表をすることができる	23	47.8	26.1	73.9
18	自分を客観的に理解することができる	23	21.7	52.2	73.9
22	必要に応じて新たに人とのつながりを広げることができる	23	30.4	43.5	73.9
5	他の人と議論することができる	23	17.4	52.2	69.6
20	チームにおいて自分の役割を見出し、担うことができる	23	21.7	47.8	69.6
21	今の自分にとって必要なことを学び続けることができる	23	21.7	47.8	69.6
26	現場に足を運び、自分の目で見て考え、行動できる	23	8.7	56.5	65.2
11	新しいアイディアを得たり発見することができる	23	17.4	43.5	60.9
23	自身の想いを相手に伝え、巻き込むことができる	23	17.4	43.5	60.9
24	異なる意見に折り合いをつけ、新たなアイデアを考えることができる	23	13.0	47.8	60.9
1	計画や目標を立てて日々を過ごすことができる	23	8.7	43.5	52.2
2	社会の問題に対して分析したり、考えたりすることができる	23	8.7	43.5	52.2
25	社会の変化に興味を持ち、これから必要になることを考えて行動できる	23	0.0	47.8	47.8
3	リーダーシップをとることができる	23	8.7	39.1	47.8
19	身近な課題を見つけたら、自ら進んで解決に取り組もうとする	23	8.7	39.1	47.8
10	時間を有効に使うことができる	23	8.7	34.8	43.5

肯定的回答が70%を超えた項目を見てみると，こちらは多岐にわかっている。【協働力，社会文化探究力，計画実行力，異文化受容力，発信力】などである。特定のカテゴリーで特に力がついているわけではなく，バランスよく力がついていることが分かる。ただ，共通点もある。Q38－12「困難なことでもチャレンジできる」，13「人の話を聞くことができる」，14「自分とは異なる意見や価値を尊重することができる」などの物事や他者に対する姿勢や，Q38－9「コンピュータやインターネットを操作できる」などの単純なスキルに該当するものがほとんどである。高度な思考力が要求されるものはQ38－18「自分を客観的に理解することができる」くらいである。

反対に，肯定的回答が60%を切ったものを見てみると，３つの特徴がある。１つ目は，Q38－2「社会の問題に対して分析したり，考えたりすることができる」25「社会の変化に興味を持ち，これから必要になることを考えて行動できる」などの高度な思考力が必要なもの。２つ目は，Q38－3「リーダーシップをとることができる」，19「身近な議題を見つけたら，自ら進んで解決に取り組もうとする」など，姿勢を持っているかどうかで終わらず，実際の行動に結びつけることができているのかが問われているもの。３つ目は，Q38－1「計画や目標を立てて日々を過ごすことができる」，10「時間を有効に使うことができる」など計画的に行動することができているかを問われているものである。

Ⅳ　おわりに

島前高校の教育と，卒業生アンケートの結果を見て成果と課題を考察した。

島前地域への愛着や帰属意識などは高校生活の中で高まっており，全国のどこにいても島前地域のことを心にとめて活躍する人材を育成することには成功している。課題発見解決力についても，【創造力・リーダーシップ・協働力・人間関係形成力・異文化受容力】などにおいて内閣府などの調査結果と比較すると，有意な差を出している。社会貢献ができるという実感，社会貢献をする際に生じるであろう困難にチャレンジする力，忍耐強く考え抜く力，嫌なことでも逃げずに本気で取り組む力など，非認知能力に関する数値が高かった。経済産業省が出している「社会人基礎力」や文部科学省が提唱する「学力の三要素」など，従来の学校教育の中では十分に育むことが出来てこなかった力―そもそも育まれているかどうかさえ検証されてこなかった力―が，島前高校の地域課題解決型の探究学習の中で育まれていることが分かった。非認知能力は，意識してすぐに身につくようなものではなく，その力を発揮する場面を経験し続ける中で成長していく。カリキュラムに埋め込まれ，２年以上にわたって正解のない難題に対して他者と協働して向き合い続けたり，自分たちなりのアイディアを出して実践していく中で徐々に力がついていったものと考えられる。

一方で，対象を分析して考えたり，議論するような抽象的思考力は低かった。リーダーシップや計画的に行動する力も全国調査の平均よりは高かったものの伸びしろはかなりある。これらの力は教科学習の中で育むことも有効である。探究活動だけに頼らず，キャリア教育全体の設計をした上で，現状で不足している力を補う学習活動をカリキュラムの大半を占める教科学習の中にいかに埋め込んでいけるかが次の課題と言える。

最後に，島前高校の教育実践の効果や価値をより正確に測るためには，入学時と卒業時の変化を数年にわたって追っていく必要がある。今後の研究課題としたい。

「註」

(i)スーザンA.アンブローズほか『大学における学びの場づくり』玉川大学出版部 2014

(ii)中央教育審議会（第32回）配布資料２－２　初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（審議の中間まとめ）

(iii)中室牧子『「学力」の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン 2015

参考文献

１）岩本悠，山内道雄，田中輝美『未来を変えた島の学校』岩波書店 2015
２）中室牧子『「学力」の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン 2015
３）アンジェラ＝ダックワース『やり抜く力』ダイヤモンド社 2016
４）スーザンA.アンブローズほか『大学における学びの場づくり』玉川大学出版部 2014

平成25年度　1年生「総合的な学習の時間」の年間計画案

平成26年2月24日版

目標	
	□自己実現と地域・社会貢献を果たす夢を描き、進路の方向性を定める。 □自分や地域・社会について学び 迷う過程を通して、主体的に考え、協働的に学び、自律的に行動する基礎的な態度と能力を身につける。 □主な重点：・人間関係形成能力(1学期)　・職業観勤労観(2学期上)　・自己理解能力(2学期下)　・将来設計能力(3学期)

学期	予定 月	予定 日	予定 限	単元・テーマ	学習活動・到達目標	備考	探究の過程
1	4	10	3	人間関係構築	＊事前アンケート　・異文化との出会い　・相互理解　・違いの価値　・適切な自己表現　・他者を尊重し、自分を伝える　・異なる価値観の受容と多様性の力など	＊豊田庄吾氏(学習センター)	①
			4				
			5				
	4	18	6		歩こう会に向け「地域を観る視点」を学ぶ		
	4	25	5		・学年目標の設定1　・歩こう会等で見つけた島の宝の共有と観光企画づくり　・高校時代とGWの目標を考える	＊今の自分を確認するアンケート(本来は初回に実施の予定)	
	4		6				
	5	9	1	学ぶ姿勢づくり	・学年目標の設定2 ・メモと感想の書き方		
	5		2				
	6	4	1		・「社会に出て仕事をする上で必要な力～関係性、主体性、社会性～」を体験的に学ぶ仕事体験ゲームを実施。特に異文化との「関係性」を重点にする。	＊豊田庄吾氏(学習センター)	
			2				
			3				
			4				
			5				
			6				
	6	13	6	地域を知る	・夢探究導入(夢探究の流れ、ルール等、夢を描くために必要なもの)		②
	6	20	5		島前3町村の魅力と観光資源を知る	＊3町村観光関係者	
	6		6				
	7	18	6		地域探究の視点や価値、方法、地域に出る作法を学ぶ	＊集落支援員	
夏季休暇						＊島探究(地域活動・体験)をして、ワークシート記入	
2	8	22	6	地域を知る	・島探究(夏課題)の共有		
	8	26	5	高校時代を考える	・先輩から、高校時代のやって良かったこと、後悔していること、今の大学・専門学校・仕事の話を聴く　・高校時代の目標を考える	＊卒業生が参加 ・全体で話を聴く時間と分科会として聴く時間に分ける	
			6				
	9	3	5		・夢を描き、実現していく力をつけるには1	＊文科省長田氏	
	9	5	5		・夢の種集め(貢献:役に立つ、人の笑顔につながること)		
	9	12	5		・自分の今いる場所を知る ～島前高校の歴史と今と未来～ ・この高校で学ぶ意義やどんな高校や高校生活にしたいかを考える	＊講師:吉元魅力化事務局長	
	9		6				
	9	19	5	上級学校を知る	・大学と専門学校の違い(＊「文理の違いを学ぶ」は進路LHRで済み) ・多様な学問分野を学ぶ	＊中村(さ)	
	9		6				
	10	3	5		・大学とは、総合政策学とは ・進学、就職を見据えたキャリア学習を進めるために	＊島根県立大学来校(入試センター及び田中利徳元校長)	
	10		6				
	10	10	5		・大学進学を考える、鳥取大学とは‥入学センター山田准教授 ・地域学部とは。大学授業紹介(地域福祉概論)‥竹川准教授	＊10月8-9日に島根大学等見学 ＊鳥取大学来校	
	10		6				
	10	15	1	仕事を考える	・地域資源を活かした仕事　～高校生が仕事をつくる～	＊「高校生レストラン」の仕掛け人　岸川政之氏	
	10	17	6		・地域社会と仕事の関係・新しい仕事をつくる1(説明とチーム分けなど)	もしくは、多様な業界、業種を知る・多様な職種、職業を知る　調べ方を学ぶ	
	10	24	5		地域の仕事1～教育、医療、福祉の魅力と課題、可能性～(教育・医療・福祉関係者)	＊チーム毎に着席 ＊チーム毎に企画を考えワークシート記入	
	10		6				
	10	31	5		地域の仕事2～一次産業の魅力と課題、可能性～(農水畜産業者など)	＊外部講師と事前の趣旨の擦りあわせと授業時のコーディネートをしっかり行う(講師任せにせず、適宜講師と生徒を仲介する)	
	10		6				
	11	5	5		地域の仕事3～新しい仕事、事業、起業の魅力と課題、可能性～(新規事業関係者、起業者)	(株)巡の環　阿部社長	
	11	8	2		発表準備		
	11	14	5		・生徒の考えた新しい仕事企画の発表及びコメント	(株)巡の環　阿部社長、海士町産業創出課長　大江氏	③
	11		6				
	11	21	5	自分を知る	・チーム活動の振り返り(自分やチームメンバーから見た私) ・社会力自己チェック　・自分の好き・得意を知るワーク　・自分のタイプ分析	＊他の生徒から「私」に対するコメントを書いてもらうワークは今年度は実施せず	
	11		6				
	12	5	5		・自分が高校で学ぶ意義を考える(マナイギシート)	＊中村先生	
	12		6				
	12	17	2		・ライフカーブで過去(8年間ぐらい)を振り返る	＊宿題:ライフカーブ2013で今年1年を振り返る	
	12	19	5		・自分の価値観を知るワーク　＊中村先生 ・2013年の振り返りと今年の私の漢字	・冬の課題と方法説明＊他者アンケートを宿題＊冬の課題シート2種類渡す	
	12		6				
冬季休暇						＊親戚など5人からの自分に対する評価を収集 ＊興味ある仕事を調べる	

島根大学教育学部附属教育支援センター研究紀要
『島根大学教育臨床総合研究 2018 Vol.17』掲載